



おいしいお甘薯……………お話

高千穂學校主事 伴 茂樹

客月神田青年會館に於けるお伽俱樂部例會に於て談話したる
梗概なり。女子の武士氣質を鼓吹す。

今から大抵七八十年程前、岩代の國會津と申すところに、大層な
飢饉がありました。其の時分、丁度會津の町から三里ばかり離れ
た田舎に、或るお侍さんの家がありました。其のお侍さんは、別
に殿様におつかへ申して居るのでもなく、只の浪人であつたもの
です。毎日近所の子供を集めて、本や算術などを教へ、やう
く朝夕の細い煙を立て、居ました。ところが「親切な先生だ」
「よい先生だ」といふ評判が、だんごと村中に響いて参りました
から、習ひに来る子供も大層多くなつて、中々賑やかに暮せる様
になつたのです。其處へ丁度飢饉になりました、初めの中は、お
弟子だちも参りましたが、段々と方々のお家では、子供を手習に

出してかくどころではなく、暇を見ては山に登つて、薪をとり、葛の根や草の根を堀り、木の實をとらせなどして、お稽古などにやるどころではありませぬ。それで、今日も一人へり、あしたも二人へりといふ様な工合で、遂々みんなさがつてしまひました。お侍さんも初めの内は、今迄貯へてあつた物で支へて居ましたが、日数がたつのに従つて、段々に食べるものもなくなりすから、高いお金でお米を買ひ、お金もぢきになくなりすので、今度は、着物を賣り、箆筒を賣り、其の外のお道具を賣りなどして、少しづつ、食物を買つて居りましたが、しまひには最早品物もなくなりました。

此のお侍さんのお家には、梅ちゃんといふ八つになる子と、一郎さんといふ五つの子と、去年生れた赤ん坊とがありました。此の三四日食物らしい物は少しも口に入れませんから、飢を訴へてヒヒと泣きます。今日といふ今日は、もう米櫃の底を拂つて、之にお芋の切れ端を混ぜて、お粥をこしらへ、自分たちはたべず、小供たちに食べさせ

て下さいました。けれど満足な食べ物でありませぬから、夕方になると従つて、だん／＼お腹がすいて来て、いつもの通り泣いて食を母に求めます。お梅さんは大きいので、もういくらせびつても何も食べるものはなく、却つてお母さんをお困しめ申すのである事を知つて居りますから、初の中は飢をこらへて何も申ませんでした。もうこらへかねて、弟と一所に母にせがみつきます。赤ん坊は、母の乳に一生涯懸命にかぢり付きませんが、日頃充分の食べ物がないのですから、しなび切つて僅ばかりも出ません。お梅さんは、實に此の世ながらの地獄の様な心持で、最早子供等と共に飢死と心を定めましたけれど、如何にも行末のはかない事を思ひまして、二人の子供のかつえ泣くのを見て、涙の瀧は、とめる瀬がありませんでした。其の中に子供たちは、泣きくたびれたのでありませう、其のまゝ、瘦せた紅葉の様な手を枕にして、かすかに哀な聲を出しながら目を閉ぢました。母は今まで少しは五月蠅いと思つて居ましたが、今更だ瘦せては居ますが、がんぜない神の様な子供の

寝顔を見ますと、却つて哀れさが増して参ります。暫く其の寝顔を打ちまもつて何か考へて居ましたか、やがて思ひ付いた事のある様に、太く低いため息をつきながら顔を上げました。其の顔色は青く、大變淋しく、そして、云ふにいはれぬ苦痛の色が現れて居ました。静に立つて奥の押入のわきで、何かゴト／＼として居られましたが、愈々決心したといふ様な様子で、臺所にあつた古い手拭を頭から頬被りをし、そつと水口の戸を明けて外に出られました、外には中空に秋の月が鏡のやうに澄み渡つて、心の底まで透き通されるやうでありました。外に出たお母様の手には、一つの鍔れかゝつた箆がありました。あゝお母様は其の箆を持つて何をなさるのでありませうか。

* * * * *
お母様は月に射られて心に譴がある様に、徐々とうつむいて歩いて居りましたが、其の目には絶えず月明りにも、憐な露のやどりが見へて、口からは大きい吐息をして居られました。だん／＼進んで、

ある家の生垣の前で、はたと歩みをとめました。が、其の時お母様のからだは、ぶる／＼と振へ、目の露の宿りは、五つ六つ地の上に落ちました。お母様は何をなさる積りでせうか。一寸あとさきを見廻しながら、生垣の破れから、中にはいられました。生垣の中には、一面にお芋が生へて居ました。お母様は暫く考へて居ましたが、やがて畑に向つて一禮をし、蹲つて息をはづませながら、何やら籜の中に入れて居ましたが、まだ中程にもなりませんのに、立ち上り、又畑に一禮して元の垣を抜けて外に出ました。お母さんは十二三歩ばかりは急いで馳けて來ましたが、其の時叢雲に覆はれて居た月が、一段と輝きはじめまして、其の光をわびたお母様はハタと立ちどまつて、心中に考へられました。今このお芋を兒供等にやれば、さぞ喜ぶであらう。さぞうまがるであらう。けれ共之はよその畑のものを取つて來たのである。親の身として、たとへ餓に死んだとて、他人のものをとつて自分の子供にたべさせやうとは、あゝ如何にも恥かしい淺墓な考であつた。いつそ

これは元のところにお返しして来やう、それがいと、二歩三歩あともどると、不意に木陰から一疋の犬が出て来て、お母さまに、二聲三聲ワン

と吠え付きました。あらく／＼犬でさへ此の通りに咎める。實に恥しい事だ。と考へて、元の垣の破れ目のところまで戻つて参りましたが、又考へますのに、今此の儘に何も持たずに家に歸つたならば、矢張り子供等は餓に泣くであらう。何となしに子供等の聲が耳につく様だ。早く持つて行つてやりませう。と今度は急ぎに急いで、自分の家の水口のところまで参りましたが、水口に手をかけて、中にはいらうかどうしようかと躊躇してゐましたが、度丁その時、家の中で、小さい子のシク／＼泣く聲が聞えたものですから、お母様はもう前後の考もなく、夢中で家の中にはいつて、小さい子のそばに行つて、そつと床の上からたいてやりますと、又スヤ／＼と寝入りました。お母様は、今とつて来たお芋を洗ひませうと思つて、箆の中をしらべて見ますと、お芋よりも、草や土の方が多く、お芋はたつた三本しかありません

んでした。お母さまは、急いで其のお芋を洗つて、小さく切つて、水で之を煮はじめました。

ところが、子供等は初めから、餓にこがれ、泣き疲れてねてゐるのでありますから、今お芋のよい香をかいで目を醒まし、みんなお母さまの側によつて来て、「お母さん何？、お芋？、私にも頂戴な!! 早く頂戴な!!」といつて、まだよく煮えないのにそばから／＼お母さまにもらつてたべてゐました。その時の子供達の顔は近頃になく嬉しさうな賑やかな顔で、お母さまは久し振りに子供の嬉しい顔を見ました。そして子供たちが、皆お芋を手持つて、「おいちいねー」「うまいねー」といつて居りますとき、奥に書き物をして居られたお父さまが出て来られました。平生の聲で、「そのお芋は？」と尋ねました。お母さまはその聲が雷の様

の色を現はし、顔には絶え難き苦痛の涙があふれ、
太く力ある息をしながら、嚴かな調子で、

「そなたは情無き事をしました。そなたがその
様の事をするとは思ひませんでした。人間は困
難の極點に遭遇しなければ誠の心は知れぬ者で
ある」

と申しました。之を聞きましたお母さまは、そこ
に泣き伏し、小供の愛にひかされて、つい人倫の

道を缺きました事をいろ／＼に詫びまして、殘の芋
を持主に返す事まで申し出しましたが、お父さま

は中々お聞きになりませせん。お母さまも覺悟の色
を表はし、最早此の場合になりましては、子供等

に見苦しい餓死をさして長き苦痛を見せ、死後ま
でも人の口にかけてますよりも、一時の苦痛を忍ん

で……これ私も豫て覺悟は定めて居ります、と
いつて兩の肌をぬぎますと、肌には先程着かへら

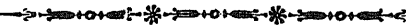
れたのでありませう、白い肌着をつけ、肌着の背
中には、南無阿彌陀佛の稱號さへ書いてありまし

て剃刀まで境中して居られました。お父さまも妻
の斯程のけなげな決心に感心され、朽ちても腐れ

ても武士の片われ、小供等も不憫ではあるが、こ
れも前世の因縁といひながら、暫し小供等の手を
握つて黙然として居られました。今まで、お芋の
味に舌鼓を打つて居ました子供等も、此の騒ぎに
あきれはて、開いた口もふさがらず、お芋を板の
間に落し、意味もなしに涙を流してゐました。煮
かけてあるお芋は、水がなくなつて、ジイ／＼と
こげつゝいてゐました。

お父さまはやがて奥から刀を持つて來られ、子供
等に因果を申し含め、淋しく冷たき最後の笑みを
浮べて、今や一人の子供を刺さうとしましたとこ
ろに、不意に水口の戸を蹴外づして、三人の若い
男が飛び込んで參りました

「わあお師匠さん、お待ち下さい、まわい……
私達は芋畑に毎夜々守をするものです、毎
夜ぬす人がはいつて來ますから、油断なく守つ
て居りましたところ、今宵一人の女の人がはいつ
つて來ましたから、私達が様子を見て居ります
と、其の人は絶えず涙を流し、畑にお辭儀をし
ながら、箆に一ぱいにもならない中に逃げて行



く様子は、心からのぬすみとも思へませんから、後をついて参りますれば、お師匠さんのところの奥さんでした。其所で私共も一時はおどろきました。が、お師匠さんの奥さんともあるべき方が……と誠に見下げはて、暫、中の様子を伺つて居りましたが、只今の一分一什で残らず私達の心に感動いたしました。始て之こそ眞のお侍と思ひました。此の村に、お師匠さんの様な方が居らつしやるのは大變村の名譽で御座います。どうぞ不覺な事をなさらぬ様に、皆さんのお困りにならない様に、私達が引きさうけ申しました……」

甲「オイ權助、お前、村長さまのところに行つて来い。こゝおれは八右衛門さんのところに行つて来やう。」

といふ譯で、其の男達が村中に云ひふらしたものですから、此飢饉の中にもかゝはらず、あちらからはお米、こちらからはお芋、あそこからは粟を、といふ工合で、一日の中に、庭先に二三ヶ月程も支へられる程の品が集まりました、其れから後は、

親子四人は、何の變りもなく豊に暮したといふ事
であります。めでたし〜〜

